

伊勢湾台風体験記

（二十年を振り返って）

は　じ　め　に

長島町の水害は、天文三年（一五三四）から明治二九年（一八九

六）までに実に三〇数回あったと記録されています。（長島町誌）

長島の歴史のなかで、祖先がいか
かに水に苦しみ耐えて来たかがう
かがわかります。これも周囲を水に
囲まれた輪中長島の宿命でありま
しょうか。

未曾有の大災害と言われた伊勢
湾台風の惨状は心に深く刻み込ま

れ、何時までも消え去ることはな
いと思います。

その翌朝、決壊口の近くの淀み
に大きな鯉が悠然とおよいでいた
のが妙に印象的で、荒狂った前夜
の事が悪夢のようであった。

然し現実には流失して壊れた家屋
家財道具の山、あちらこちらで発
見される犠牲者の遺体、飲む水も
ない口の渇き、このような大惨事
を二度と繰返さないように心がけ、

治水防災を完全なものにすること
が尊い犠牲者に対しても、又海拔
（一）地帯に住む私達の当然の責務で
あると思います。

伊勢湾台風二十周年にあたり体
験記を寄せられた多くの皆さんに、
心から御礼申し上げますと共に、
その全文をこゝに掲載して当時を
偲び、水との闘いを心に留め、こ
の小冊子をして自らの水防意識を
高めることが出来ますれば幸に存
じます。

昭和五五年九月

長島町教育長 諸戸時博

目次

（五十音順）

逆巻く高潮をくぐり抜けて-----殿名 伊藤 重信	1
伊勢湾台風に思う-----長島町職員 伊藤 美寿	9
伊勢湾台風体験記「妹のこと」-松蔭 伊藤みよ子	10
台風 の 夜-----長地 大橋 繁松	12
私の体験-----松蔭東 加藤美奈子	13
伊勢湾台風の思い出-----押付 坂倉 房子	15
伊勢湾台風の思い出----長島町職員 坪井 達	18
伊勢湾台風の苦い経験 （当時の日記の一部）-----下町 永井 まさ	20
伊勢湾台風の思い出-----新栄 丹羽 重子	22
伊勢湾台風、私の体験-----大島 平野 もゐ	22
伊勢湾台風の思い出----長島町職員 水谷 一郎	25
伊勢湾台風と長島町-----改良区 武藤 繁一	26
伊勢湾台風の思い出----長島町職員 村上 光弘	29
伊勢湾台風を思い出して----中筋北 諸戸 三吉	30

逆巻く高潮をくぐり抜けて

殿名 伊 藤 重 信

○日時 昭和三十四年九月二十六日

○伊勢湾台風高潮被災場所 長島町殿名九七

七（現七一）

○被災者の家族構成

筆者50才（高校教諭）、妻48才（家事多少
営農兼養鶏約一五〇羽）、長男26才（公務員）
、長男の妻22才（当日は名古屋の実家にあり）
、次男21才（会社員）、三男18才（高校生）
、父81才（営農名義人）

一、伊勢湾台風（15号台風）高潮来襲前後の
状況

大型台風15号が刻々日本本土に近付きつつあるとの情報は九月二十三日頃からあった。九月二十五日には前線性の強い雨が断続的に降りはじめ、ことに夜に入ってはげしくなり、夕刻からの会議解散後名古屋からの帰宅は、非常に困難を感じたが、ずぶ濡れになった。

翌二十六日も断続的な雨は続いた中を出校した。台風15号の性質、進路については、気象台からの発表に注意を払っていた。当日の正午、学校（名古屋市内）で、名古屋地方気象台の台風警報三号を聞き、学校長に進言（当時はまだ台風・大雨などの警報が発令された場合は、児童、生徒を下校帰宅させるといふ、県教委の通達はなかった時代）して生徒を帰宅させた。教職員も早々に下校帰宅した。筆者も台風からの家の防備をあれこれと考えながら、名古屋駅を通ると、駅構内、地下道に、風呂敷包一つを枕に、多くの者が寝そべっている。台風なんかくど吹く風か、明日にはまた明日がある。彼等には家もなく、定職も持たないようだ。こんな時には無一物の者が、一番強く気楽である。少しばかりの家産を持っている者は苦勞しなければならぬ。彼等が羨ましいと、苦笑しながら急ぎ足で通り

過ぎ、近鉄電車で帰宅した。

超大型台風が東海地方に接近、高潮警報、波浪警報は出ていたが、過去に高潮洪水の経験なく、住居も伊勢湾から約九km奥で、高潮波浪が木曽・長良両川を溯上しても、堤防を過信していたから、これらの災害の想定もつかず、専ら台風対策だけが念願にあった。三男も学校から帰ったので、二人で一所懸命に台風防衛を講じていたが、未だ台風中心の進路が不明。当時は東風約十m/secぐらい。時々驟雨が降った。ラジオの警報に耳をそばだてていたが台風の進路が掴めず気持ちが落付かなかった。夕刻から風がやや南がかり、雨が激しくなった。いよいよ当地域は、台風の危険半円に入る見通しと腹がきまり、家の東・南・西の防護策に忙殺された。

十八時頃長男・次男が相次いで、土砂降りの中をずぶぬれになって帰宅した。これでわが家も心強くなった。台風よ!! いざ来い!! の心構えもできてきた。停電のないうちに夕食を急ぎ、「戦闘準備!! 腹がへっては戦はできぬ」と冗談をとばしながら夕食を終った。

先ず、東側のガラス戸から雨の降り込みが目立った。聲で防護するのも惜しい気持で、

あり合せのもので防いでいた。十九時頃停電、大事な台風情報も聴けなくなった（携帯ラジオなし）。家中暗黒。いよいよ不安な夜になった。用意していた四本の懐中電灯を使用しはじめた。家は大きくても風や雨のみでは、さしむ音ひとつしない。屋外の風雨の荒狂う音のみ。屋根瓦が飛びはじめたようだ。風雨の唸りにまじってガラガラと絶え間がない。諦めができて「明朝は家が丸坊主だ。十万円で、また屋根直しか」と笑っていた。必然的に二階の雨もりが始まった。洗面器・バケツ・盥・湯桶・洗濯機の蓋・鍋釜まで動員しても追付かない。ついに二階の畳をあげ、襖を外し家具類を一方に寄せてビニール、毛布類をかけた。階下の東及び南のガラスも二、三枚割れた。もう惜しんではいられない。畳を当てて防護した。長男、次男は二階、私と三男、妻は階下とおのずと防衛分担がきまった。父（81）を奥の仏間に待避させ、暗い中を動かないようにと蒲団を延べて坐らせた。子供や妻は「親父がこんな大きな家造ったからこんな時に大変だ（昭31宅地造成・新築）」とぼやいていた。

二十時頃正面玄関が吹き抜かれた。風は南に廻ったようだ。長男がこの音に驚いて二階

から降りてきた。押入れの板戸二枚を外してこれで手当をしたが、風の息で逆に外へ取られてしまった。長男が裸になり裏口から外へまわり外部の点検。玄関も代りの戸を補充した。この二枚の戸を私と三男が支えている。妻は東側のガラス戸の破れに畳を当てて防いでいる。長男が砂や礫が体に当り、前隣の屋根瓦が飛んできて危ないといながら裏口から戻ってきた。この状態が約二十、三十分続いた。時折雷光がガラス戸に映って見える。愈々台風眼が近付いているのであろう。そのうちに風は少し西がかったようだ。「もう一時間の辛抱だ!! がんばれ!!」と家族を激励していた。「お父さん、交代しようか」と長男が降りて来た。尿意を催したので交代をたのんだ。丁度その時玄関に降りた長男が「水だ!!」と叫んだ。足許を見ると板戸の間から浸水している。早速玄関からとび上り、東の部屋の窓ガラス越しに懐中電灯で見ると、濁水が宅地の上を波打って流れている。「水だ!! 全員二階へ上れ!!」と叫びながら二、三の部屋を走り、仏間の父に「水が入ったようだから二階へ避難しよう」と、ろうばいして

いる父の手をとり、茶の間を抜けて階段に辿りついたが、その時は最早浸水床上五〇cm股

のあたりまでつかっていた。ガラス戸、障子、襖が音もなく倒れて畳の上に乗ったまま浮いている。家財道具も散乱して浮かんでいる。妻もころびながら二階へはい上った。長男が「裏の雨戸を明けようか」といったが、「家の中のものが流失するからやめよ」と、二人で父を二階へ階段を押し上げた。玄関に居た三男は水圧のため土間にたたき付けられて、足に軽傷を負いながら二階へはい上がった。この間約三分、階下は渦巻く濁流、最早手のほどこしようもなかった。

家族全員不安に戦く顔を二階十畳の座敷に揃えた。父は「仏壇は? 位牌は?」と問う。子供は「お金が」という。殊に次男は本日給料の繰上げ支給を受け、背広の内ポケットに入れたまま階下においてあった。妻は食料の心配をしている。然し階下は濁流が渦巻いている。「全部諦めよ!! 下へ降りるな」と止めた。前隣りも二階へ避難したらしく、懐中電灯が点滅している。間もなくガラスの割れる音、柱の裂ける音、複雑な大音響と共に家の西南部の二階が下がった。愈々これまでと観念して、子供らに「愈々家も駄目だ!! 押入れの板戸四枚を外してロープで縛り筏を造れ!!」と命じ、協力して板戸の隅に金槌で

穴をあけ、ロープでかがり合わせて浮筏を急造した。「最悪の事態になった。最後は死ぬば家族諸共だ。筏につかまって漂流する。散り散りになって死恥は曝したくないから、皆が筏につかまっているのだ。体をしぼりつけているのだぞ!! 脱出する時は私が真先に筏のロープをもって飛び込むから、後に続くのだぞ」と厳命して、二階裏側の出易い窓際で待機した。父は頭を垂れて震えている。妻は震えながら念仏を称えている。子供等は脚下を見たまま無言。全員肅として声なし。私は「これで全員死んでも嫁(在名古屋実家)が残り家の始末はつく。長女は嫁して(在四日市)孫もあるから血統は絶えまい」と考えていた。しばらくして「煙草が欲しくなった」と長男をうながして、煙草を持参させて長男、次男にも煙草に火をつけてやった。一口吸い込んで「末期の煙草はうまいなあ」と冗談をひとこと云ったら、全員が元氣を取戻したようだった。

家の内外はまっ暗。風雨は唸り濁流の音だけである。不安はつのるばかりだ。次男が外で救いを求める声が聞えるようだというが、他の者には聞えない。次男の錯覚ではないかと云い合っていた。そのままの姿で夜を徹し

た。二階正面を防護していた次男は、高潮の浸入は勿論見えなかったが、南の方から一面に白い霧のようなものが押寄せて来た。その時、階下から「水だ!!」という叫びが聞えてきた、といっていた。子供は替る替る時折階段まで水を見に行き、階段が五段上っている——十四階段——、七段上っていると云って引返してくる。最初一時間ほどは水位は変わらなかったが(最高水位床上一・五八m)後は水位は下るようだった。私はこれで峠を越したと判断した。然し夜は長かった。

風は西に廻り、雨も少なくなつて東の空が白みかかった時はホッとした。これで命は助かった。夜さえ明ければこちらの勝だと家族一同に笑顔がよみがえった。

二、被災後の生活

悪夢のような一夜が明けた。あたりは一変している。南および東南、東と隣家四戸は流失したものらしくあとかたもない。筆者の住宅のみが水面に孤立している。庭樹も、鶏舎も、新築早々で使用了ことのない納屋もなく、ただ一面の大海原がはるか南の伊勢湾まで続いている、さえないものもない。一階は床上まで水だ。建具、畳、家財など一物も残

っていない。水につかった部分は壁のエツリ竹だけが、鳥籠のように残っている(床上浸水一・五八m)住宅の西南から西にかけて、柱が十本へし折られて、二階が危うくたれ下がっている。この破壊力は前方からの流失家屋その他の流失物の激突によるものらしい(排水後滞りになった座敷の床下から、流失した前隣の家の瓦がうず高く堆積していた。つまり前隣の家は筆者の家の座敷の中を流れたらしい)。また一階の壁の削剥状況および柱の痕跡から判断すると、直接高潮波を被らなかった屋内の濁流の静かな廊下で、浸水一・五八m(水田面から約四m)の水深となっている。家の中には伊勢湾のノリの簀、その他の雑物がいっぱい残されている。珍らしいことに、小鯨が一匹床上で跳ねていたのが愛らしかった。田舟が一艘転覆して玄関の流れたあとに漂着していた。これは天恵、早速当日から利用した。

筆者宅の被害状況は次の通り。

①建物 — 母家(建坪五〇坪)全壊、玄関流失、柱十本折損、鴨居、床板、廊下板、床の間の半数流失、建具類約八十本、畳三十七畳全部流失、一階の家財道具一物も残らず流失。

納屋（建坪二十坪）二階建一戸（農機具共）、鶏舎五坪一棟（鶏百五十羽共）あともなく流失。

②宅地——南および東、西側三面の石垣は全部壊滅、土砂約百五十立坪流失、家屋破損部の土台コンクリート、生垣、庭樹、門柱および玄関の鉄筋コンクリート柱なども全部流失。

③仏壇および一階の家財道具、現金、書類、什器、衣類、夜具類全部流失。

二十七日一日中は一物も食べなかったが、格別の空腹感もなかった。水も欲しくなかった。村人も放心状態。ただ満々たる水を眺めて溜息をついているのみであった。付近の流失家屋四戸から十名の行方不明者があった。筆者は早速例の田船を漕ぎ、部落中をまわって行方不明者の搜索を説き、ようやく災害後の活動が始まった。行方不明者は全員死亡していた。その発見まで二三日はまるで夢のようであった。またその間勤務先・親戚・知人へ、生存の連絡、災害復旧のための人夫・資材などの手配で過した。三日目に意を決し、衣類と履物を頭にしばりつけて、道路の決壊箇所（国道一号線新栄橋）を泳いで渡り、伊勢大橋に辿りつき、徒歩で桑名へ出て、旧知

の土建業者に家の復旧の手配をし、親戚で自転車を利用して、国道一号線を四日市へ、娘の嫁ぎ先の材木商へ家族の無事安全を知らせ、復旧の資材と大工の手配の依頼をすませて帰った。桑名（四日市）間はすでに冠水こそはなかったが、何処も同じようなひどい荒れ方であり、富州原の国道に大きな石油タンクが三個流れついていたことが印象に残っている。

三日目に玄米の握り飯が一人一個宛と梅干が配給された。いよいよ部落毎に炊き出しが始まったのである。その玄米の握り飯は、三日間ほとんど食べなかったあとのこととて、その味はいまだに忘れられない。その後は部落の旧輪中堤の高所で炊き出し、田船で各戸を廻って配給と、各戸から交代当番で出ては水が引いて自家炊事ができるまで続けられた。この頃になると、毎早朝南部伊首島の漁船が、二艘ぐらいで組んで、冠水田や宅地の間隙を、北へ或は南へと航行していく。南部では水難犠牲者が多く、その遺体の搜索らしい。気の毒な事だ。その航行の都度、水に浮んだ壊れ家は、その航跡波によってゆらぎ心細い毎夕のように堤防や高い所で、引揚げた溺死死体の火葬の煙が、あちらこちらで数知れず立ちのぼる情景。遠望していても鬼気迫り無

常感におそわれる。冥目合掌の日が続く。豚・鶏、中には牛の水死体も数多く浮んで、壊れ家の流材・建具などと共に、潮の干満の流れについて漂流し悪臭を放っているが、処理する場所もなく手の施しようがない。無惨なことだ。地獄絵図さながらの光景だ。これらの溜り場は、国道一号線の尾張大橋詰、農協、役場付近の街裏、近鉄・国鉄路線堤、北部では長島輪中北の詰りの新所・松ノ木堤沿いが一番多い。或いは行方不明の水難犠牲者も、遺体となってその中に埋れているかも知れない。

配給当番の外は自宅の取片付けに追われて日を過した。日が経つにつれ、親戚・知人・教え子が各方面から、遠くは東京・京都（BCテレビで筆者宅の被災生活を見たとか。筆者はテレビの効果に感謝した）からも、次々と救援を受け、冠水中も食べるものと、着るものには全く不自由しなかったことは、涙の感激であった。ことに桑名市在住の朋友から招かれて、一週間ぶりの入浴と欲待で、家族の今迄の緊張がほぐれ、蘇生の思いをしたこと（帰路は国道新栄橋付近が約二〇〇m満潮につき、暗闇の中を自衛隊員が、懐中電灯を頼りに一人ずつ手を引いて越させて呉れ

た)。町内又木の旧輪中堤添いの佐藤昌胤氏が、別棟の一室を開放して、家族が交代で水のない場所で休息安眠ができるよう取計って下され、入浴・救援・激励と親身の世話に長期に亘って御厄介になり、罹災後奮起できたことは、終生回想するところとなる。この頃からぼつぼつ救援物資が配給されるようになった。家は傾き今にもくずれ落ちそうだった。被災の翌日に漂着していた電柱類を二、三本緊急借用して、母屋の垂れ下った部分の支柱としたが、こんな応急処置はほんの気休めに過ぎない。毎日二回の潮汐の満干には、流水が家を洗い宅地を削る。また満潮には床上まで水に浸る。実に身をそがれる思いがするが、手の施しようがない。夜半にひたひたと家に打ち寄せる波の音に、身の衰れさをしみじみと感ずるが排水の見込みは立っていないようだ。そのうちに十月初旬に小型台風十六号の襲来予報のおまけまでついて、一同絶望感を抱かせる一幕もあった(十六号台風は東海の海上を北東に通過、当地には少々風雨の外直接被害はなかった)。当局および自衛隊は昼夜兼行で、仮締切工事を行っているが、なかなかの難工事のようだ。雨が降れば雨もりで家の中でも身のおきどころがない。水の見え

ない所で和服にくつろぎ、畳の上で大の字になって寝たいというのが、当時の素朴な願望であった。台風十六号の予報で、壊れかかった家が危険なので、二階の畳建具類、家財道具を源部、又木の旧輪中堤添いの浸水しなかった家に預けて、家には一物もなかった。被災直後、親戚からトランジスタラジオを入手したが、災害関係の報道の外は、野球・相撲・娯楽放送はもとより、政治向のニュースまでもが、縁遠いことのように、かえって腹立たしくスイッチを切ってしまった。

- ・野分^のき暴れ屋根漏る月は句にならず
- ・雨降ればもる雨防ぐすべもなく
- ・心もぬるる罹災者あわれ
- ・うつせみの憂ひ極まれり大破せる
- ・家内^いにしげし雨の漏る音
- ・救恤の夜具に一夜をさこねして
- 窓に流れる月を見ており

十月十六日に初めて桑名川口(七里渡址)・名古屋港經由の舟便で出校した。城南も、海部郡南部海岸も、名古屋港沿岸も大荒れで何処も同じである。七里の渡しを通っても次・喜多の東海道膝栗毛の気分どころのさわ

ぎでなく、満目荒涼たる有様だ。学校の生徒・教職員に一名の水難犠牲者もなかったと知って、涙がとまらなかった。しかし毎日通勤は不可能。名古屋駅前の知り合いの旅館に次男と宿泊して、通勤することにした。(長男は嫁の実家に泊って出勤)しかし妻と三男と老父が守る留守宅の模様が、気にかかって落付かない。五日程で校長に事情を話し、諒解を得て欠勤を続けることにした。次男を残し、独りで大垣廻り養老線で帰宅した。帰途美濃多芸輪中も水滴々(本輪中は本年二回目の洪水)。自宅に帰ればこわれ家の整理に忙殺されて日を送る。

十月二十四日長島町北部の仮締切工事が完了し、ただちに排水作業がはじまった。毎日の勤務に、炊き出し作業に疲れ切っている体にも、希望が湧いてきた。杭に目印を刻んで、朝な夕なに排水の進捗状況を見るのが、楽しい日課となった。十一月三日に初めて黒い土が顔をのぞかせた。その黒い大地は荒れているが、ほめてやりたい衝動^{いんどう}にかられた。また同じ日からは電灯がともった。部屋の中がまぶしく、安心感が増した。十一月十五日に一応排水が完了し、五十日ぶりに水曜から解放された。水が引いて驚いた。宅地の土砂は流

失して、池の中の杭（基礎工事のコンクリート杭）の上に傾いた廃屋が、辛うじて残っている始末である。

さあ、これからが復旧だ。急がねばならない。冬將軍のあしおとが聞えはじめた。無我夢中。予て手配してあった人夫・大工を連日指示して一緒に、復旧工事を急いだ。

思ひもかけぬ突然の災害で、用意の資金もない。借金や金繰りのことをあれこれ考えると、日々働いてくれる人夫や大工の顔を、まともに見ていられないくらい心は暗い。然しこのまま放置しておくわけにはゆかず、なるようになれ、一路復旧作業に突進するのみに腹を決めた。

さらに交通機関が開通したので、十二月三日より学校へ出勤した。学校には学校の仕事で山積している。家には家の仕事が一杯ある。いくつ体があっても足りない。かくするうちに正月を迎えた。

・野火むなし災害あとの稲を焼く

・満目蕭条十里塘 迎春野田転荒涼

・何災欲問無人識 只祈平安仰彼蒼

・よろこびもくるしみもはるか除夜の鐘

・暮も暮大晦日まで災害復旧

・債鬼立つ門さえほしい大晦日

（債鬼＝借金とり）

・屋根塞ぎ片側壁で春迎う

・身一つが流れ残って年を越し

・人並に正月祝うか貰い餅

・正月も戸締りのないわが家には

戸惑いしてか出たり入ったり

あの悪夢から半年たった時には、住居のみ辛うじて生活し得る程度に一応復旧し、あとは永年計画によるしかない状態であった。しかし何よりも家族全員が無事に逆巻く高潮を乗り越えたこと、社会各方面のあたたかい救援によって、復旧の途をすすんだことを心から感謝したい。因にわが家の改良復旧計画が完成したのは、昭和四十六年秋まで待たなければならなかった。その間昭和三十六年末に老父は急死したが、災害時流失した仏壇（本尊木仏は間々で拾い上げられ戻っていた）を嘆いているのを見かねて、復旧の金繰りに悩んでいたが思い切って、昭和三十四年暮に、父の選んだ仏壇を買入れた。後父の死に際会して、大そうよいことをしてやった、と今でも心密かに満足感をもっている。今になって子どもたちは「親父は家や屋敷の工事をし

ている時は、眼の色がちがう」とよく笑われている。

三、此後のこの種の防災についての私見
戸数一、六七四戸、人口八、七〇八人の長島町に、今回何故死者三八三名、流失家屋二四六戸、全壊家屋二三〇戸、堤防欠壊箇所十五ヶ所（延長約四km）に及ぶ大災害が生じたか。この原因を地理学的な見地から考察し、将来の防災に資したい。

臨海の海面以下の低湿三角州輪中の高潮・洪水の災害は、過去においてもしばしばあり、将来もあり得ると思う。今回の高潮は、過去の記録を超えるものであったことは事実であるが、この輪中生活の生命線である堤防の欠壊箇所が十五ヶ所もあったことを見ても、堤防が如何に脆弱であったかが判る。この特殊環境の住民はその脆弱な堤防を過信し、しかも最近経験のないままに（明治二十九年以来六十三年間）水害に対する恐ろしさや、体験を欠いていたことに最大の原因があったことと思う。さらにその点を詳述すれば、
① 海岸より奥へ数段の旧輪中堤（現在は中仕切堤）を戦後道路拡張・土地改良に名を借りて、長地堤・鎌ヶ地堤・姫御前ノ源部

堤などの土砂を農民に与えて取くずしたことは、長島町政最大の失政であった。筆者は当時此度の高潮災害を予見していた訳ではないが、これら旧輪中堤の歴史的に見た重要性、かかる災害対策よりの重要性などを縷々述べて、現場で時の長島町長に注意を喚起し、中止方を申し入れた筈である。今回の災害も若しこれらの旧輪中堤が残されていたならば、長地・鎌ヶ地・殿名などの部落の災害の状況も、変った姿であったであろうと悔まれる。あとの祭か。

② 昔からこの地域の特異景観のひとつである水屋の取りこわし、新しい住宅にその設備がなかったこと。

③ 土地改良区画整理の結果、日常不用になった田舟をなくしてしまったこと。

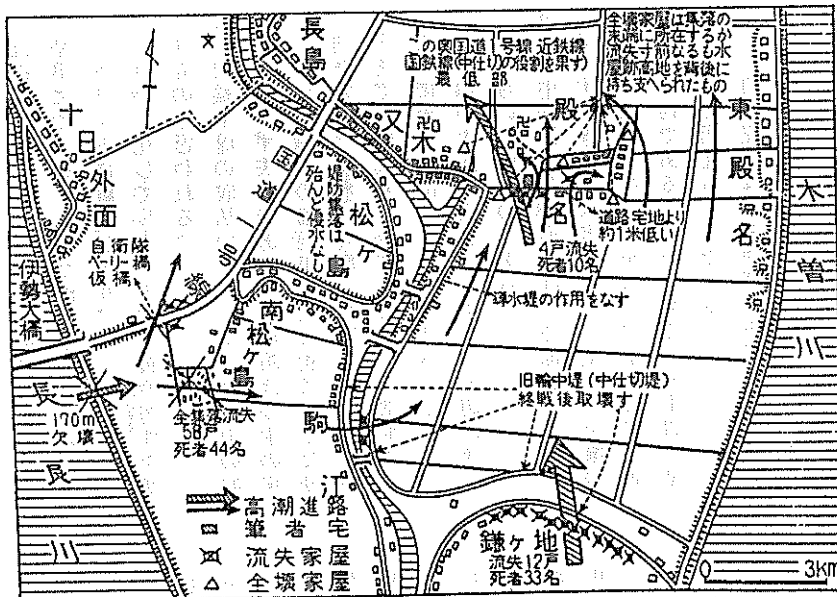
など枚挙すればその外にも色々あろう。また、個人的直接被害の原因を考えて見れば、前記諸事実に加うるに、

① 住宅の付近の西南部に当る、南北方向の源部の取り残した旧輪中堤が、姫御前源部南部の取こわし部分から浸入した高潮波の導水堤の役割を果して、その高潮波が襲来したこと。(下図参照)

② 旧内川澤先を埋め立てた部分に、宅地を

造成したこと。

③ 殿名部落内の道路が、一般住宅地面以下になって居り、筆者宅はこれら道路を挟ん



〔高潮進入見取図〕

で、第二線家並の中にあり、高潮波が第一線の宅地から、この低い道路へ落掘り現象を起し、それに接した第二線宅地の前面から土壌浸食をして、第二線家並の被害を更に増大させた。

④ 住宅が高潮波浸入路の通路(この奥約八〇〇〜一、〇〇〇mに国道一号线を超えて、近鉄・国鉄路線の最低部がある)に位置し、区画整理以前は、私宅地の大澤から前記近鉄・国鉄路線の最低部に向って大きな内川が残されていた。

これは輪中形成以前の乱流の跡であり、過去の度重なった洪水時の、洪水の浸入路ともなっていたものとも思われ、私宅地の大澤もその際の落掘りの痕跡ではなかったかとも思われる。

⑤ 宅地造成は木曾川砂の盛り土で、造成後日が浅く(昭和三十一年造成)地盤が固まっていなかったこと。

などが直接原因であったことと思う。「自然の猛威は、付近全般の自然環境が交らない限り、たとえ部分的に

変革しても、それは自然の調和を破ることである。その地域に強い力が加わると、環境はもとの自然の状態に帰ってしまうものである。このような地理的、物理的な原則を考慮せず、かかる地理的位置に住居地を選定したことは、地理学徒としては、まことに迂闊であり、この災害を身をもって体験するような結果になったのである。

防災対策については、公的な面と私的な面との二面から考察が必要である。

公的な面では、

① 海岸堤・河川堤はたとえ溢水しても欠壊しない強度のものでなければならぬ。もちろん高さも必要だが、今までのような外面片側コンクリートのみでは、溢水の際に内側から壊されて却って弱い。また堤腹に藪のある所の堤が残存している事実から見ても、管理上の都合もあろうが、藪を伐採させたのは失敗であつたと思う。藪は溢水時には倒伏して、堤防を被覆して藪根と共に土壌浸食、欠壊防止に役立つものである。また全面コンクリートで固めた堤防は、長島輪中のような地盤沈下の激しい地域では、地盤沈下しコンクリート堤防の内部の堤防地盤が沈下して、空洞堤が生じて外見に

は現れにくく、外型の堤防を過信している結果になり易い。また地盤変動のため、コンクリートに亀裂が入り、コンクリートがブロック化してしまうと、一層脆弱性を増すものと思われる。

② 旧輪中堤の取払い、取り下げは理由の如何を問わず失敗であつた。堤防は浸水の場合には、輪中の細胞組織的機能に重要な役割を果す。溢水、欠壊した場合でも、水勢をそぐのに大きな役割を果す。日常生活、ことに車社会に多少の不便はあつても、これは輪中生活の宿命と考えて、大切に護ってもらいたいものである。

③ 輪中内部部落の道路は、宅地面までかさ上げすべきで、水害の場合、宅地の土壌浸蝕防止に重要な意義を持つ。また日常生活にも便利である。輪中内部では中仕切り堤の役割を考えるべきである。

とに角、堤防は輪中地域の住民にとっては生命線であることをよく認識して、管理者の責任だとして、その責任を追求するだけでなく、輪中住民が一丸となつて、この生命線の監視愛護につとめなければならぬ。私的な面においては、

① 住宅の基礎工事は強固にすべきである。

在来の石並べ式の基礎、コンクリート式の基礎では、浸水時にひとたまりもなく流失家屋となつてゐる。

筆者宅は住宅新築に際し、軟弱な沖積地の故をもって、要所に水田面下七mの松杭を約八十本打ち込み、その上に鉄筋コンクリート円柱を立てあげ、鉄筋平コンクリートでつなぎ、その上に土台工事を施した。当地域では当時としては類を見ない工法をとつたため、宅地の土砂が流失して深通りに変つても、この基礎の上に、傾きながらも住宅が残り、家族の生命を完うした。

② 宅地高は、この地域では少くとも伊勢湾海水面上二m以上、すなわち水田面から三m以上とし、浸水に際しては、一時は冠水するが、平時の満潮時には冠水しない程度にする。高ければ高いほどよいが、日常生活とくに農作業の便否を考えて限度を定むべきである。

③ 宅地の土壌浸蝕防止、水屋跡高所の保存も留意すべきで、現に流れる運命におかれた家が、背後の水屋跡の高地に支えられて、水勢をそがれて奇蹟的に残つた例は二・三にとどまらない。

④ かかる地域の住宅は、必ず二階建とすべ

きである。高潮波来襲の際、家を出て避難せんとしたほとんどの者が死亡している。最近鉄筋ないしブロック建築がぼつぼつ目立つが、当地のような軟弱地盤の所では、地盤変動で歪みを生じた時の処置が困難であり、また大きい地震災害の時に、クィッ

伊勢湾台風に想う

長島町職員

伊藤 美 寿

クサンド現象によって倒壊の例もあり、考慮すべき問題ではあるまいか。

以上主として罹災の生の体験を記し、災害時各方面からの温かい救援を受けたことを感謝しつつ結びとする。大方の御叱正を乞う。

の稲も、あつという間に泥海となり、死者三八二名、負傷者多数、流失家屋二四六戸と未曾有の大災害を受けたのである。

それ以後は毎日他県からの救援物資の割り振り、舟・自転車で各自自治会への連絡、水びたしになった各種台帳等の整理など、非常に多忙な日々であった。

これらも今となつては一昔前の話となつてしまった。

でも、あの当時の他県から受けた援助、御恩、自衛隊員の献身的な復旧活動のおかげで現在の長島町があると思う。

あれから早や二十年、忘れる事の出来ないあの恐ろしい伊勢湾台風、私は社会人として新しく出発して一年半、ようやく職場にも馴れ、楽しく希望にみちた日々であった。

当時の長島町は、水稻・菜種等の栽培で、のどかで大変平和な農村地帯であった。六月の田植え、十月下旬の取り入れ、長島町独特のクリークの多い町内は、すべて舟運搬で、現在ではとても想像する事の出来ない優雅な生活であった。

ところが、三十四年九月二十六日、あの伊

勢湾台風の発生。我々は上司の命令のもとにそれぞれの分担についた。当時は今の様にテレビも少なく、情報機関も乏しく、又被害経験もなく、いわば、のんびりしたムードの中の体制であった。台風は本土では、九州・四国に上陸するものと思い、よその出来事の様子のんびり思っていたからである。

しかしこの台風は、三重県・愛知県など近辺に『カツ』を入れるがごとく、おそつて来たのである。

のどかで平和な町も、取り入れ前の黄金色

我々は、当時の教訓を生かし、現在の情報網をフルに活用し、地域住民には、いち早く正確で、たしかな情報を伝えて、万全の防災体制をしく事である。これには常日頃から各人が応急の備蓄、有事の際の避難場所等の確認、伝達事項・指示事項等の厳守と、行政機関との連携を密にして、国民一体で努力する事であると思う。そうしてどんな災害でも最少限でくい止める体制を作っていかなければならないのではなからうか。

伊勢湾台風体験記

「妹のこと」

松 蔭 伊 藤 み よ 子

時間ははっきりと覚えていないけれど、あれは九月二十六日午後九時すぎでしょうか、新築後十年にならない家が初めて雨もりし、廊下がぬれたのです。父が「これはおかしい。外はよほどの雨やな」と東側の玄関へ目をやると、はきものが浮いてきていた。

「もうあかんぞ！ 堤防が切れたみたいや、みんなこい！」と大声で叫んだ。六十才の祖母、前年の七月実母を水の事故で亡くした私たちの二人目の母、六年生の姉、四年生の私、二年生の妹、そして幼稚園へ通っていた下の妹の六人は何もわからぬままに走ったような気がする。とにかく父の大声は大変なことに違いない。こわくなってきた。みんな真剣である。三メートル位先にはコンクリート二階建の納屋の入口がある。でも困ったことに戸

が打ちつけてあるので、ここから出られない。裏へまわって米などを貯蔵しておく物置へ入った。しかしここから階段の所へ行くのに又入口の戸が開かない。

そうこうしているうちに水はだんだん押し寄せ、もう私の腰の上ぐらいになってきた。父が「みんなおるか！ はなれるなよ！」とか「大きな板につかまれ、流されるな！」と大声で叫ぶ。もうとにかくこわくてふるえていた。私は「父ちゃんどこー！ どこにおるの！ なんにも見えやんに！」と何度聞いたことでしょうか。「ばあちゃんどこー、死んだらあかんに！ 死んだらあかんに！」すべてまっ暗闇で腰まであるいは胸のあたりまで水につかってふるえている状態での叫びである。誰の顔も見えないし、手にも足にもとどかな

い。何時ごろでしょうか、材木が流されてきてあまったショックか何かで物置の入口の錠がこわれて戸があいた。姉一人だけが流されて出て行った。父が「まさ子！ まさ子！ ぜったいに階段につかまらなあかんぞ！」と言うと姉は「父ちゃん、わかった」と泣き声で言っていた。そして姉は水に押し流されずに必死で階段にたどりつき助かったのです。

それと同じ位の時間ででしょうか？ 嫁いで二年にもならない母の背中にいた下の妹がいなくなったのか「れい子がおらん。れい子がおらん」と泣きそうである。「れい子どこいったの！ れい子どこにおるの！」と祖母も、妹も姉もみんなが大声で叫んだ。「れい子どこや！ 返事しよ！ れい子どこにおるんや！」「何度叫んだことでしょうか。しかし返事はなく押しよせてくる。父は休みなく叫び続けている。「みんなおるか！ ばあちゃんもええか！」その度に、みんなは「ここにおるよう！」とか、「手がいたいよう」とか、口々に言った。又妹は「足がとどかん、足がとどかん」と叫んでいた。「手をはなすなよ！ 大きい板につかまっとれよ！」と又父が叫んだ。何も見えない真暗闇でただ通じるのは声だけ

であった。その間にも母は「れい子が行ってしまった。れい子を死なしてしまった」と泣き叫んでいる。恐いというより、もうへとへとに疲れてしまった。

いったい何時ごろでしょうか。水の流れも落ちついた。父が「寝たらあかんぞう！もうじき朝やでな」と言った。真暗でどっちが入口やら出口やらさっぱりわからない。板につかまったり、板の上に浮いて、何時間すごしたであろうか。「父ちゃん、あの白とこなに？」と私が聞いたら、「ああ、もう朝やな、あそこは窓や」と言った父も悲しげであった。「れい子は本当にかわいそうなことしたな。どこへ行ったやろな、みんなで呼んだのに」。口々に又「れい子！れい子！」と叫んだが、五才のれい子は答えなかった。

そしてやっと階段を上って二階へ落ちついた。窓から見たものすごい状態に、この台風がとてつもなく大きなものであったことを改めて知らされたのです。近所の人々の声がどこからか聞こえてくる。「喜雄さんどこは、よかったかな！」と聞かれて、「れい子を死なしてしまった」と父が答えていた。そしてどこどここの家が流されたとか、いろいろ報

告しあっていた。

台風一過と言うけれど、にくらしいほどのさわやかな秋晴れであった。西へ三軒目の新屋が何もなしで流されてしまった。父の姉の家である。いとこたちはどうしているだろう。もう世の中の何もかもがひっくりかえってしまったような気がした。私は学校の友達に会いたかったし、先生のことも早く知りたかったので「父ちゃん、学校へ有線かけて！」とたのんだが、「そんなもん、今有線がかかるか！」と言ってかけてもらえなかった。「そやけど、みんなどうしとるやろねー」そんなことばかり言っていたような気がする。

父は「れい子がかわいそうやで、はよがしたらな、あかんや」と言った。流された新屋は東福豊の方で見つかったけれど、妹は仲々見つからなかった。新屋はおじとおば、そして三人のいとこの内真ん中の男の子が亡くなった。八才の一番下の女の子は奇跡的にも、その押しつぶされた屋根の下で四十数時間後にずぶぬれで、弱りきった姿で助けられた。

けれども、れい子は見つからなかった。台風から五日位たったでしょうか、父が「ひょっとしたら家の中におるかもしれんなー」と

言って、材木やら、ワラやら、家畜の死骸やらをどけて、さがしはじめた。そして数時間後、「れい子がおった。れい子がおった」と叫んだのです。誰かの手によってムシロが一枚敷かれ、父に抱きかかえられたれい子はその上に寝かされました。「かわいそうに、よく水飲んでぶくぶくになったな」と父が言った。泣けてきた。とにかくみんなが泣いた。来年は学校へ行くんだと喜んでいた、あんなに元気がかわいかった子が、みんなより先に死んでしまった。涙が止まらなかった。そしておじや、おばと同じように、れい子も簡単に火葬されてしまったのです。

未の子を死なせてしまった父や母は本当に悲しかったし、くやしかったにちがいない。ませんでした。しかし一夜にして両親と家を失ってしまったいとこ達のこと、又部落の人々のこと、収穫前の稲を完全にやられてしまった田んぼや道路の復旧のこと等、父には自分の子のことよりもっと大切なことがたくさんあるかのように見ええました。

私たち三人姉妹といとは津へ疎開し、帰って来ても本当の姉妹のように私たちの家で一緒に暮らしました。

伊勢湾台風とはこんな思い出を残した台風です。

あれからちょうど二十年、私たちのまわりのすべてはめざましい復興をとげ、あの時のおもかげは何もありません。私たち姉妹もいともみな結婚し、子どももあります。ちょうどあの時のれい子と同じ齢になった長男を見てみると、二十年前とは違った父や母の悲しさ、苦しさがわかるような気がするのです。あんなにぶくぶくになって死んでいった我が娘の姿は言葉にはあらわせないものだったでしょう。まだ私たち夫婦はあの頃の父や母の年齢にはなりませんが、「子をもって知る親の恩」とか「親心」とか言われる意味がよくわかってきたこの頃です。

あの強くてやさしかった父が交通事故死してから早や七年が過ぎました。

いつの頃からかもう「れい子」の事も「父」の事も段々と話さなくなってしまうしたが、子どもたちが大きくなったら又、いろんな思い出を聞かせたいと思っています。

最後に、いつも台風が近づくとびに防災警備にあたっていただく方々に対してお礼を申し上げ、又この平和がいつまでも続きますようにお祈りして筆をおきます。

台風の夜

長地 大橋 繁松

ああ昭和三十四年九月二十六日、忘れる事の出来ない伊勢湾台風の襲来より二十年。当時の想い出……。

当日いつもの通り両親は早く寢床につく。

風雨はだんだん強くはなつてはいたが、大きな台風には、まさかなと思えず、雨戸には門をかけ、とばない様に釘や針金にて戸締りをしていたが、その内電灯は消え、ラジオは聞けず、台風情報は不明。

懐中電灯の電池を取って携帯ラジオに入れて台風情報を聞く。名古屋方面の最も強くなるのは午後九時前後と記憶する。電池を抜いて又懐中電灯に入れて家の内を見廻る。へこの時七時半頃。

風雨益々強くなる。両親、子供一所に集る。父、母はこれは大変な台風になると心配する。其の内屋根瓦は飛び雨もりがはげしくなる。雨戸の門が折れそうになる。

あ、大変だ。雨戸より水が入って来た。すぐ堤防が切れたと直感し、一枚の雨戸をこじ開けて、皆を別棟の二階へ上げる。子供にはもう大丈夫だと励ます。妻が母より六月に生まれた長男をおびかえる。

其の内、ドシンと云う音と共に家がかたむく。二階へ上げて居たタンスが倒れる。水が入って来た。

両親と長女、妻と次女、屋根の上へ上る。瓦をはずし、しっかりつかまっている様にして、皆を励ます。私は次女（幼稚園）をしっかりとつかえる。風波益々強く、無気味な光がピカピカ光る。

家が流れはじめ。風波の間より灯が見え、人の流れて行く様に感じる。其の内に屋根が二つに分かれ、父が其の方に流された様だ。呼べど声なく、荒れ狂う風波のみだ。流される内、大きな木のある所が見えて来

たが大きな流れの渦の中に流れ込み、大きな波をかぶる。其の時、母と長女（小学三年生）と妻と長男（生後三ヶ月）が波にのまれる。「お父さん」と云う声がして妻が必死で流木にしがみついた。長男が帯から抜け、流れそうになる。思わず片手にて抱きかかえる。

母と長女の姿はなく……。

あ、家が見えて来た。窓より懐中電灯がふられ、声が聞える様だが、其のまま流される。眼前に黒く土堤が見えて来た。そこへ流れつ

私の体験

松蔭東

加藤美奈子

昭和三十四年九月二十六日、土曜日。当時十二才中学一年生でした。学校から帰った頃には風雨も強くなり、早目に夕食をすませて夜を迎えました。八時頃牛小屋の牛が脱走。私達家族も避難するべく、全員合羽を着て出ようとしても歩ける状態ではなく、思いとどまっていたら、隣のおじさんが、何か大声で

く。思わず上へ上ると、線路が見えた。どこへ流されて来たのかと呆然となる。妻と次女を上げ、線路をつたって高い所へ移動する。ここは関西線にて押付とわかる。へ父、母、長女（小学三年）遭難へ

*

あれから二十年、伊勢湾台風被災後をふりかえり、当時を偲び、今の繁栄生活を思うとき、多くの犠牲になられた方々の御冥福を心より御祈り致します。

叫び、表の戸をドンドンたたく音がした。父が必死の思いで表をあけたら、「堤防が切れて、水が入ってきた」とのこと。その時八時半頃、もうみるみるうちに水が入ってきて、家の中を走り回り、ひとまず離れの方の屋根裏へ上がり、父が屋根を破ろうとするのだが、なかなかうまくいかず、そのうちに家が壊れ

て下に落ち、家族バラバラになった。私は離れが壊れて落ちる時、母屋の方へとびおりたのです。その時、何故か祖父だけが母屋に残っており、祖父の持っていた懐中電気の明かりでダンスや仏壇が流れていくのを見ました。それも一瞬の間でそのまま濁流にのまれ、渦に巻きこまれてしまった。渦にまかれると、地面へたたきつけられるような勢いで、又、上へ浮いてくる時は、誰れかに首をしめられているような、もがけばもがくほど苦しくて、やっとの思いで浮かび上がって、流木にしがみつきました。その時、暗くて何も見えないのだけど、弟の泣き叫ぶ声ははっきり聞こえました。私のすぐ近くにいたのだと思うけど、私は、苦しくて声を出せる状態ではありません。なにしろ、すごい波と風雨で頭だけ水から出ているだけだから、力の限り流木にしがみついても波にふりおとされてしまします。

沈んだり浮いたり繰り返して、もう落されまいとして、必死で流木につかまりながら、靴をはいていた足が重いし、スカートカバは、流木がひっかかるので、取って捨てた。流木にしがみついている時に見えたのは、異様な光でした。そこら中、ちょうど船が明り

をつけて魚を採っているような、そんな光が見えました。頭だけしか上がっていないので、水は飲むし、流木は頭や、つかまっている手に当たるので痛いし、もう落されまいと、ただ夢中でしがみつき、どれだけ流されたか、ふと前を見ると家の壊れた、大きな木があり、その上へ必死の思いではい上がることが出来、やっと、上半身水から上がることができました。私は何回沈んでも浮いてきた時に運良く頭が上がりましたが、上に流木がいっぱいあって頭が上がらなければ死ぬより仕方ないことです。

そのうちに今まで感じなかったのに、寒くて寒くて降りしきる雨に打たれて震えていました。ただ耳だけはよく聞こえました。流され始めた時の弟の泣き叫ぶ声が耳から離れず、弟のことばかり思っているうちに、流木が頭に当り出来たコブの痛みも、自分で自分の手をつねってみるのだけど、しびれちゃって痛くありません。

流木の上にうつぶせになっていて、どれだけたったか、ふと弟の話し声が聞こえるのです。(今考えれば風の音だったと思います) 私は力の限り弟の名前を呼び続けました。私の私の呼ぶ声が、流れついた先の人達が屋根

に避難していて、かすかに聞こえたらしく、誰れかいるぞということで、「おい、こっちへこーい。こっちへこーい」と、呼んで頂きました。私は頭を上げて、最後の力をふりしぼって声のする方へ真暗な中を四つんばいになって、少しずつ少しずつ近づいて行き、人影らしきものを見て初めて「助けてー」と叫びました。やっとの思いでたどりつき、その家の御主人様に手を引張ってもらって屋根へ上げて頂きました。

その家族は、何故か全員が南京袋をかぶっていました。私を助けて下さった御主人が自分の南京袋を私に貸してくださいました。そして、「ここは白鷄だけど、お前さんは、どこの子や? どこから流れてきたのか?」という質問に、松蔭と答えるのがやっとでした。助けてもらったと思ったら、又もや大きな津波がきて、その御主人が「全員屋根の棟にある針金に取まれ!」との指示。私は又流されるのかと、震えていました。その波でその家も壊れ、屋根の瓦も半分位は割れて落ちました。幸いにもその頃になってようやく風雨も弱まり、壊れた家はそのまま流されずにすみました。

助けてもらったのが朝の三時半頃。思えば

約七時間位流されていたことになる。助けてもらった人達と屋根の上で明るくなるのを待ち、明るくなってから、消防の人達が伝馬船で迎えに来てくれました。明るくなってみてびっくり、とてもじゃないが見えていたら動けるような所ではなかったのです。ガラスの割れから、釘から、いっぱいある所を、よくまあ、たいした怪我もせず、四つんばいになってはって来たものだと思いました。

八時半頃になって、私の父が消防の人達に聞き、迎えにきてくれました。その時、父が「美奈子一人か? 他のものは?」と聞くのですが、私一人だけと答えるだけ。父の話によれば、少し離れた所に姉や祖母がいるとのこと。

それから、残された家族をじつと待っていても何んの連絡もなしのどがかわいて、水が欲しくて仕方がない。イヤという程飲んだ泥水があるだけ。髪の毛はクシャクシャ、体は全身浮き藻だらけ。歩くにもはくものがない。流れている片らんばの下駄を拾ってはく。着ているものは破れていて、しかも泥だらけでも着替えるものもなし、自分の家のあった方をながめてみて、海と同じ、何もなし。帰る所も、食べるものも、お金もなし、不思議

議と、これからどうしたらいいのか考えませんでした。ただ思うのは残された家族の安否ばかり、特に私は、泣き叫んでいた弟の声が耳から離れず、他人の子供が弟に見えて仕方ありませんでした。結局は、母、祖父、弟は

伊勢湾台風の想い出

押 付 坂 倉 房 子

帰らぬ人となりました。
以来二十年、私は風呂以外は、海水浴も、プールにも入ったことなし、一度も水につかって泳いだことはありません。

伊勢湾台風があつてから、もう二十年になるとか……、でも私の心の中には、まるで昨日の事のように、あの恐ろしかった夜の事が忘れられない。

あの日、どんよりとはしていたが、お昼頃までは大した風もなく、あんな大きな台風が来るような日とは思われなかったような気がする。

国道一号线沿いで煙草屋をしている、私の店には、木曾岬の青年の人達が五、六人、ジュースを飲みながら、「台風が来ると云つて

おられたし、又、近くの建設業をしておられる伊藤政義さんも、ローソクを買いに来られて、「台風は、どうやろうなあ」と、云つておられたくらいだったのに、……それから数時間後には、亡くなられてしまおうとは思つてもみなかった。

それでも、風がひどくなつてからでは出来ないと、店を出すまで住んでいた方の家にかんぬきをかけ、賁簀で囲つて店へ帰つて来た。その頃から、そろそろ風が始つていたので、早めに夕食の仕度をしていると、名古屋の高校へ通っている長男が帰つて来て、

食事もそこそこに、むこうの家が心配だからと、見に行つてくれた。(そちらには、祖父と、伯母が居たので)

店をしめたら、また後から見にゆくからね……と云っていたのが、見にゆくどころか、それから急に雨も風も強くなつて来て、もう外へも出られなくなつてしまった。

店の方は、何時でも出来るからと、かんぬきもしてなかったもので、裏(東南)から吹いてくる風で、表(北西)の雨戸が外れそうになるので、大急ぎで長い竹を持ってきて、しっかりくりつけ、やれやれと思つていと、ますます強くなつた風雨のため、屋根瓦がガラガラとめくられる音がし出した。すると、雨がポタポタ漏り出して、買ったばかりのテレビをぬらしては大変と、布団をかけたたりして居るうちに、益々風は吹きつので、戸袋の上の壁が、ドサリと室の中へ落ちる。そこからヒューヒュー、ザーザー雨風が吹き込むので、縁板を外して釘で打ちつけ、まだ無心に寝ている子供達を起して、庭においた。その頃から電燈がつかなくなつてしまつて、真暗なので、風で消やされぬ様、近くにあったハンゴウの中へローソクを立て、それと共に子供達を、家が倒れた時の用心に、机の下へ蹲

ませておいた。

ガタガタという音に、ふと見ると、雨戸のない庭のガラス戸が大きくしなびて、今にも飛ばされそうになっているので、これは大変と、主人と次男、私の三人で、畳を上げ、ガラス戸に押し当てて、一生懸命押さえつけていた。雨もりで、頭からずぶぬれ、寒さと緊張でガタガタふるえながら、力の限り三人でふんばっていても、今にも外れそう。ますます風は吹きつづり、次々と、瓦のガラガラ飛ぶ音がする。家は、ギイギイ不気味な音をたてて、きしみ出す。もう駄目だ。早く台風が通り過ぎてくれます様に、と、神仙に祈るよりしようがなかった。

懐中電燈で照らして見た主人の腕時計が、九時一寸前だったと思う。九時頃に中心が通ると云っていたから、もう一寸の辛抱だ……と、はげまし合っている時、机の下に蹲ませておいた子供達が、「アッ、ハンゴウが流れる」と云うので、「えっ」といって見たら、庭へ水が入って来ているではないか。大変だ、表へ出よう、と手を取り合って飛び出そうとしたが、始めに、竹を持って来てくくりつけてしまったので、出ようにも出られず、とっさに、店で売っているカミソリのある事を思

い出し、手さぐりで探し出して、ゴシゴシやったら切れたので、主人と二人で雨戸にドーンと、ぶつかって表へとび出した。

もうその時は、水が首までぐらい来っていたから、出たものの、そのまゝでは逃げるに逃げられず、一家全滅してしまうところだった。ところが、幸運にも、とび出した目の前に大きなトラックが止まっていた。後で聞いたら、風がものすごいので、少しでも家の蔭の方がいいと思って、車を止めて寝ていたのだそう。寝ている運転手さんをたたき起こし、主人と私、それに三人の子供の計五人、運転席へとび乗った。助手さんをふくめ、みんな七人、よくも乗れたものだと思う。

目を覚めた運転手さんもビックリ。

「どちらへ行ったらいいですか！」

「前へ行ったら沈んでしまうから、尾張大橋の方へバックして……」と、真暗な一号線をバックしてもらう。だが、窓へ押し寄せる波で、広い一号線も、何処が路なのかさっぱりわからず、持って出た懐中電燈をたよりに右、左、と運転手さんに云いながら少し進んだ所で、近くの藤花堂さんの看板が目に入る。このお店も車と一緒に流されている……と思っていたら、後でわかった事だが、私達の車

の方が、空まわりしていて進まなかったのだ。やっとの思いで尾張大橋近くのガソリンスタンド水谷さんの前まで登れた。でも、まだ水がつく様な気がして、「大橋まで逃げて」と云ったら、「少しでも家の蔭の方が風が当らんでいいから」と云う事で、車を止めた。すると、真暗で、よくわからないが、下の方から流木につかまって流れついた人や、家に乗ったまま流れて来た人達が、国道にぶつかって、「助けてくれー、助けてくれー」と声がする。

消防団の人か誰かが、私達の乗った車の運転手さんに、「ライトで照らしてくれ」と云われる。「バッテリーが上がってしまおうと困るが……」と云いながらも、いい人達で、ライトをつけたままにして下さった。その明りの中から一人、二人と、助け出される姿を見つづる。私達も庭へ水が入ったときに見つけたからよかったが、床上まで来るまで知らないでいた。助からなかったらと思うと、ぞおーとした。(店の方は平屋なのです)。

ホッと一安心すると、長男や伯母、祖父の居る家が心配になって、暗闇で、すかして見るが、わからない。出て行って堤防から廻わってみようとしたら、運転手さんが、「今出

で行って、あんたに、もしもの事があつたらどうするんですか」と叱られ、明るくなるまで待つ事にする。車のラジオを聞いていると、もう中心は遠くへ行つたとの事だが、相変らず風は強く、どれ位たつてからだろうか、風向きが變つて西風の吹き返し車が今にも飛ばしそうに吹いて、濡れた身体に、寒さが身に沁みた。

うす明るくなつたので、国道から家の方を見ると、荒れはては居るものの形だけぼんやり見えたので、長男の名前を呼んだら、二階から懐中電燈をふつて、合図した。「みんな助かったー?」と大声でいってみると、「うん助かった。でも伯母さんが……」と云う。暫くして村の方達が舟で来られたので、見に行つてもらつたら、寝たきりだった伯母が畳の上に乗ったまま浮いていたそうで、天井板をぶち破つて、二階へ上げてもらったとか。後で長男に聞いたら、水が来たと気が付いた時は、もう畳がプカプカ浮いてしまつていてどうする事も出来ず、自分自身やつの思いで畳の下をもぐり泳いで裏の小屋根につかまり、二階へ上つたのだそうだ。

すっかり明るくなつた目の前に、一晩のうちにはすっかり變り果て、何にもかも濁流につ

かつてしまった風景があつた。改めて台風がいかに大きくものすごかつた事か……と思いつつ、果然と堤防に立ちつくして居た。と、誰かが又増水しそうだ、と云つたので、又舟を出してもらい、伯母を二階から堤防へ移し、丁度残つていた水防小屋へ入れさしてもらふ事にする。

助けてもらった運転手さん達は広島県の豊表の問屋さんで、東京へ行つた帰りに長島を通りかかつたのだそうで、「貴方達が出てこれなかつたら、何にも知らずに眠つていて死んでいたかも知れなかつた」と、喜んで居られた。そして、「水が引いて家へ入れるようになるまで、居てあげますよ。……」と云つてもらつたが、仲々すぐには入れそうもなく、一号線は水浸しで通れないので、何日かたつて、何処からか遠まわりで帰れるとの情報で、帰つて行つてもらいました。あの人達の家の人も心配して居られたそうで、無事な二人を見て、赤飯炊いて祝われたそうだ。親切な人達で、次に東京へ行くときに畳の床を沢山積んで持つて来て下さつた。その御縁で今だに文通をつづけて居る次第です。

親切と云えば、前に云つた政義さん方では、御主人が行方不明で、それどころではなかつ

たでしように、少々落着いてきてから、気が付けば何にも食べるものの無かつた私達近所中の者に御飯の炊き出しをして下さつた事、本当に有難く思いました。

近鉄を境にして上と下では随分被害の度合が違つていましたのです。複線化の工事が済んで、この朝、始めて開通したばかりの近鉄は、線路も鉄柱も、ひん曲つてしまつていましたし、線路の上には、おびたらしい流木やら、こわれた家財が泥まみれになつて重なり合い、近くには人の死体や、牛、豚、にわとり等の死骸が一杯浮いていて、本当にこの世の地獄でした。

国道から、もう一軒の家の方へは大分離れているのに、その裏の近鉄のガード下に、どう流れついたのか、店の陳列戸棚がコワレコワレになつて流木と一緒に浮いていましたし、車も、そんな所まで流されているのがありました。後で思えば、その近くに私の家の小屋の屋根も見えていたのに、流された事に気付いたのが遅かつたので、見に行つた時にはもうありませんでした。線路を越えて、小島の方までもテレビ、店のウインド等は流れて行つていました。勿論泥まみれのコワレコワレで使いものにはなりません……。海岸堤防

の締切りが出来るまでは、干潮になると庭が出て、満潮になると床上まで水が来る毎日でした。荒れ果てた我が家には、二軒とも入る事が出来ず、堤防の上のバラック生活が、どれ位つづいたか、もう覚えていませんが、伊勢の方へ疎開させてもらっていた、中学生の次男、小学生の長女が、帰って来たとき、「やっぱり、家はいゝなあー」と、まっ先に云った言葉が、忘れられません。すき間風が吹き込む、ガタガタのバラックなのに……。その

伊勢湾台風の思い出

長島町職員

坪

井

達

昭和三十四年九月二十六日、この日は私にとっても忘れる事は出来ない日であった。

当日、私は上司の命を受けて、千倉排水機場勤務を命ぜられた。役場に奉職して半年を経験したばかりの新米職員は、災害に対する認識、又、心構え等も極めて軽薄であり、むしろ私のような者が排水機で何の役に立つの

子供達も、今は成人して結婚しました。

あの時、杳然と、なすすべも無く、眺めていた泥海も、それぞれに姿が変り、田の面には、稲がたわわに稔り、造成された宅地には沢山の家が建ち並び、もう、あの時の影も形も見えない、平和な風景です。

どうぞ、この平和が、永久につづきます様にと折りつつ、そして又、亡くなられた方々の御冥福を折りつつ、つたない筆を終わります。

か、疑問にさえ思えてならなかったように記憶している。

兎に角、風の強いのに参った。たまたま当日は北部小学校で青年団の行事があつて参加していたが、時間がだんだん経過して行くうちに、風が強くなって来た。急いで排水機へ直行しようとした。しかし強い風の為、な

かなか思うように歩けなかった。屋根瓦が木の葉のように飛んで来る。時折りは、道路の端にしがみついて風を避け、やっどの思いで到着出来たくらいであった。

その後、一段と風雨が激しくなり、今にも雨戸が飛ばされるのではないかと心配をしていた。電気は停電し、排水機は動かず、電気が来て一刻も早く排水出来るのを待つだけであった。

ローソクの火の中で、先輩達より災害のいろんな体験の話を聞いていた。長良川の水位の観測は行っており、水位の上昇は著しかった。

しかし、当時として、私達はあの万里の長城のような（当時は、そう感じていた）堤防が決壊する事は、全く考えてもいなかったし、又、そんな事があるものかと、信じてもいた。何時頃だったろうか、堤防の上で人の声らしきものが聞こえた。「堤防が切れた」と云う事であった。それも千倉の排水機が切れたと云う事であった。一瞬、ぎくりとしたが、今いるところは別に決壊もしていない。ただこの附近の人達の多くは、一番危険なのはこの附近だと思われていたのであろう。事実、危険な箇所であると聞かされた。

闇の中で、すかして見ると、もう一面は海であった。これは大変な事になった。私達は南に向かつて堤防添いに走った。風は幾分弱まっていたのだろうか、さして走るには支障は無かった。

国道一号线を越えて足が止まった。大島までの堤防が、ずたずたに寸断され、無惨な姿をさらしているではないか。一瞬、目を疑った。しかし、まぎれもない、濁流がどんどん町の方へ入って行くのが、闇の中にもはっきり判った。

「長島町が水に沈んでしまう……」こんな事が有るものだろうか。全く信じられない思いではあった。

その時には、もう、町内の人達は各地で濁流と闘っておられたのであろう。遠くで人の声らしきものが聞えて来た。しかし、我々はどうする事も出来なかった。

とうとう町中が泥海と化してしまった。それからの仕事は、又大変であった。特に、先輩達の活躍は目覚しかった。家が流された方も、又家族の方で犠牲となられた方もおられたであろう。日夜救援対策のため、家庭を顧みる暇も無く、奮闘されている姿を目の当りに見て、仕事の厳しさをつくづく感じずには

いらなかった。

私達は新米職員のため、ほとんど雑役的な仕事が多かった。遺体の搜索、救援物資の配付等、毎日毎日が初めての、又過酷な体験でもあった。

夜になると、テントや車の中が寝場所である。我々は、なかなか畳の上では寝かせてもらえなかった。一番印象に残っているのは、テントの中に救援物資が高く積まれていた。多分甘藷だったと思う。その上で、サツマイモのゴリゴリした感触を布団代わりにして寝た時の事は、今でも、つい先日のことのように思えてならない。

日がたつにつれて、各地より多くの方々より御見舞を戴いたり、又災害復旧のため、国県、自衛隊、警察の方、その他多くの善意の奉仕の方々の献身的な努力と町民の一片となった復興への意欲により、日一日と復興への足取りを辿って行く事が、私なりにとも理解出来たし、嬉しかった事は忘れることが出来ない。

二十年を経過した今日、当時の面影は見ることは出来ないが、今、長島町を囲むあの巨大な堤防ではあるが、この豊かなデルタの町が一夜にして泥海に化す可能性は、まだまだ

無いとは言えないだろう。その保証は何ら無い。

しかし、私たちはこれを契機にして、心を新たに、町を挙げて防災に全力を尽くし、二度と再びあの惨事が起らないようにする事が、そのときお世話になった多くの方々、とりわけ又尊い水難の犠牲となられた方々に報いる道ではないかと痛感している現在であります。

伊勢湾台風の苦い経験

(当時の日記の一部)

下町 永井まさ子

停電のため、早目に夕食をすませて、一室に籠城する。其後の台風情報は知る術もなく、夜半通過の予定にしては風足が早い。隣家から、幼児づれの若夫婦と母親が「恐ろしくて家に居られない」と避難して来られる。我が家も無気味な音を立ててきしみ、揺れに揺れ、今にも倒壊しそうな恐怖に、なす術もなく、布団をかぶって神仏に祈る気持で時間の過ぎるのを待つばかりである。

一際猛烈な揺さぶりがあったから、心持風もおさまり、風向も幾分南に廻った様子に、「もう峠を越したなあ」と話しあっていた折も折、表の方で「キャア、キャア」と、悲鳴のような、わめき声をする。「この風雨の中で、どこか火を出したのかなあ」「あばら家が倒れたのかなあ」と、暗闇の中での思惑。

様子をうかがいに玄関に行った息子の「水だ！水だ!!」という叫び声に、私も飛び出して入口の戸を細目にあけてみようと、下り立った片足が、溪流に洗われるような感じをうけ、「水入りだ!!」と直観した。

咄嗟に頭に來たのが、「水害に水」の一こと。昼間用意した水は断水に備えてのもので、風呂桶・バケツ・釜とあらゆる容器に満たして、風呂場に置いてある。

「水を運んで―」

くらがりのお勝手にとびこんで、主人が手さぐりで持ってきたのは、夕食の食器がそのままつけてあるバケツだった。

「違う違う。風呂場に汲んであるの―」
不覚にも、停電に備えてあるのは太目の蠟燭だけであった。私は、ゆらぐ燭を「この明

かりを消しては、何も出来なくなる」と思っ
て、懸命に守って、たった一つ存在する祭礼
の提灯を取り出して、ようやく光明を確保す
る事が出来た。

みるみる水は増して、土間が小川になり、
アルマイトの弁当箱や薬罐が、次から次へ流
れて行くのに肝をつぶして、

「布団々々。何でも持って二階へ上がん
な！」

と子供等を叱咤しながら、自分は片手で提灯
をかかげ、一方の手で現金をポケットに入れ
給食の残りのコッペパンをふところにねじ込
んだだけであった。

主人は、水が腰にくるまでに二回バケツの
水を運んだと云うが、遂にこのバケツを二階
へ運んだ者がなく、主人の努力は水泡に帰し
た。

其処、此処にかゝっている衣類を階段近く
に待機している子供にリレー。裏口のガラス
戸が外れて、どつと水の勢をまして、畳がブ
カブカと浮き上がったときは、「もう、あか
ん」と思って階段を上った。

「父ちゃん危い！早よう上がっておいな
!!」と叫ぶ。主人は最後に、柱時計とラジオ
を引きちぎるように取って上って來た。常日

頃、縦の物を横にもしない（反対かな、横の物を縦にもしない）主人にしては大出来で、後日この奮斗は自慢の物語りである。

あの悲鳴は、平屋の人達が向いの家を叩き起こして、救いを求めている声であった。あの声を聞かなかつたら、畳の浮き上がるまで知らずにいたかも知からない。ものの三分ぐらいの出来事だった。

家具の崩れ落ちる音に、地獄をのぞく心地で階下をうかがい、階段の余す数を数えるのである。

水位が一段減った。「もう大丈夫だ」でも町中が水につかっているのだから、助けは何時のことか分からない。「しゃべるとお腹がすく。のどがかわく。とにかく黙っていよう」体力の消耗を防ぐと、孤島に流された思である。

「○○」「○○」名前には聞き取れないが、誰かを探し求める声、夜遅くまで聞こえてくる。果して瀬古の人が三、四名行方不明になったことが後で判った。あの水勢では、表に出れば、一たまりもなく足をさらわれて、押し流されるに違いない。平家で咄嗟に天井裏や屋根へ上る分別はつかない。幼児を背に、子供の手をつな

いで外にのがれようとするのは、当然である。眠ろうとしても眠れず、今はたゞ夜の明けるのが待たれるばかりである。

*

翌朝畳の上を歩いて、浮いている布団を回収。台所は板の間だから近よれないが、飯台が浮いて、その上にやかんが無事に乗っている。鴨居につかまって、夕食の残りのお茶が入っているはずのやかんを、貴重品を取る思いで、危険を冒して手に入れた。

「是で一日は助かる」と思ったのも束の間、隣家の坊が「ぶう、ぶう」と欲しがるので、無情な事も出来ず、その都度、生命の水とも思えたお茶を与える。たまりかねて、子供たち、「のどが渇くまで辛抱しては、水は無しになる。今のうちに、一杯ずつ飲んでおこう」と、一切れのパンを食べて一杯ずつお茶を飲み、残りは坊が飲んでも仕方がないと、あきらめた。

幸にも屋頂表通りへ一艘の舟が来て、おにぎりとお水を配ってくれたので、「是で助かる」と本当に安心した。長女酒高一年、長男長島中一年の秋、悔いても及ばなかった一杯の水への恨みである。

*

其後毎年警報が出ると、徒労に終わってもよいから、一升瓶の水を十本、新しいのとりかえる。

生活の本拠は、止むを得ず二階に置くことになり、階下が整備された今も、貴重品、日常品以外の衣類は二階に収納。トランジスタラジオは、見舞品に頂いた小型携帯用は二代目、加えて感度のよい中型を備えて、プロ野球に重宝。懐中電燈は各人の寢所に備え、私は毎晩枕許に置くことは忘れない。

堤防の補強工事が完成されたとはいえ、海抜〇メートルの地では絶対安全とは云えないので、この経験を貴い教訓として、我が家の防災態勢をととのえている。

（以下省略）

伊勢湾台風の思い出

新 栄 丹 羽 重 子

伊勢湾台風から今年で二十年目。

私には一生忘れれる事の出来ない憎い台風も、月日の流れとともに薄らいで来た今日、もう一度当時を思い出し、偲んでみたいと思います。

当時の私達は結婚して十一ヶ月、私は妊娠七ヶ月の身重でした。楽しい日々の続いた新婚生活も、一夜にして、衣、食、住を失ったあまりの恐ろしさに、出る涙さえなく、これから先の苦勞も忘れて、たゞ命あるのみを喜び、見るからに無残な付近、我が家を、たゞ茫然と見つめるのでした。

濁流とともに流れて来た遺体は、肉親ですら顔の見分けがつかないため、着ている衣服で判断するより仕方ありません。ですから他人がどうする事も出来ず、たゞ肉親が捜してくれるのを待つ遺体が、何体ともなしに土手に横たわっていました。

又、着る物もない私達にとっては、救援物資はほんとうに有り難く着用させていただきやがては生まれて来る赤ちゃんのために、オムツはもちろん、娘時代に習った和裁の手を生かし、一ツ身の綿入れの着物等に再生しては、利用いたしました。そして実母は自分の着物で布団を作ってくれ、二十年たった今も愛用しております。

伊勢湾台風、私の体験

大 島

平 野

す

あ

又、主人は昼間は仕事、夜は建具作りにといずれは三人で住まなくてはならない我々の家のために、一睡もせず、身体を惜しまずに励んでくれました。当時作ってくれた飯台も今なお喜んで使用しております。

又、私達子供を育ててくれた、厳格な実父があの時流した涙が、どう言う意味の涙か、年頃の娘を持つ親となった今、よく解るような気が致します。

今のこんな幸せな暮らしが出来るのも、私達を健康な身体に生んでくれた両親、支え励まし御指導下さった方々に感謝し、台風犠牲者の御冥福をお祈りすると共に、このような悲惨な台風が二度とこないように祈りつづ、ペンをおきます。

締切りがすんでしまい、どうしようかと迷って、おくれればせに、ふっと町誌を読んでい

ると、「伊勢湾台風二十周年記念として体験記募集」と載っていましたので、私の小さな

体験を書いてみよう、つたないペンを取りました。

忘れることの出来ない災害の一つです。と言うのは、戦災と言う大きな被害を受けたこともあるからです。それは、皆さんが、それぞれの分野で言いようなない苦しみと悲しみを被っていますので、それは別問題として本題に。

二十六日の夜、次第に風雨激しくなつて、水量も増し、堤防が危ないと言う状態に、外を守る消防団の通報も聞こえる由もなく、私等一家は内の中で皆んなで雨戸を一生懸命おさえて、子供だけは二階へ避難させ、次第に不安がつり、隣り近所の様子も分かりません。真暗闇の中で風雨だけが猛り狂う感じ。そのうち父が「水だ水。水だ水」水が庭へ入って来たのです。見る見るうちに足もとへ。これは大変と裏戸を開けて、隣りの人はどうして居られるやらと、心細くなつて、人を頼る心境です。（大勢の所に行けば何んとかなる。類を求めて）すると、お寺の方から「助けて、助けて」と言う声が聞こえるではありませんか。その声に、私共だけが逃げおくれたと思つて、「それ、お寺へ逃げよ」

と、とび出したのです。父は下の子を背おつて。息子は一人身軽に、す早く寺へ着いたらしい。……その時すでに水は腰までありました。息子の通つた道は、もはや流水で通れませんでした。やむなく遠廻りを。……次第に水かきが多くなり、流れは激しく滝の如く、見る見るうちに首まで水が大波小波となつておいかわさつて頭の上を流れるので、倒れそうです。水かさの増した早さは、つかの間のような気がします。流水は次々と流れ、小石は星のようになつて来る如く、こんなと足に当る痛み。無我夢中で水を切るようにして歩きました。だが、私は山国生れで泳ぎを知りません。足をうばわれて、こけそうになるのです。何度も何度も倒れそうになる足に全身の力をこめて、流水を押しつけ押しのけ歩くにも、五歩歩いて三歩、三歩歩いて四歩押し流され、足は浮くし体は水面に横倒しになりそうです。横になつたら一巻の終りで、流れてしまします。とつても行けそうにありません。二人の娘は、私を助けて後から押して呉れるのですが、急流と流水でどうしようもありません。これでは共死してしまふと思ひ、「母ちゃんいいから、ほつといつて行つて呉れ」と言ひました。けれど「母ちゃん死んじやいや」「ほ

つといつて」「死んじやいや」の繰返しで、行きつ流れつで、死の寸前をさまよつたひと時の長かつた事、口や筆につくせません。味わつた者のみ知る苦しみでしょう。……すると、一足早く着いていた息子が、或人に、「お前の所の人危ない。早く助けに行け」と懐中電燈を渡してもらつたそうです。それで夢中でかけつけて、息子の「早くそこから入れ」と言う声と明りが、真暗闇の中に千人力を得た如く、我にかえり、ほつと……。寺の横垣いに必死でよじ登り、やつと境内に飛び込みました。すると、中は別世界の如く静かな池でした。一歩外の道路は滝の如く、囲いがあると、こんなに違うものかと思ひました。九死に一生を得たとは、この事を言うのでしよう。助かった。命があつた。あとで泣けて泣けて仕方ありません。

ずぶぬれで寺へ入つた時、其所には大勢の人が避難して顔色もなく、見えない人の安否を案じて、言わず語らず沈黙あるのみでした。……それから、長円寺が危ないと言うので其所から善宗寺へ避難して続々と来ました。でも年寄り子供は無理です。助けて呉れ、助けてやつて呉れと言う声に、息子は夢中で皆んなを次々と背負つて助けてやりました。皆ん

なが重い荷物を持っていたので、重くてほり出したいくらい、苦しかったとか……。心はあっても、いよいよとなると助けに行く者はありません。我が身が可愛いのです。身輕いのも一つの助かる方法かと。（欲を捨てること）

それから又、次々と情報が流れて、あの人は死んだ、あそこは流れた、此所は分かん……と、悪い噂が聞こえて、悪夢の一夜で、ガタガタと朝まで震いが止まりませんでした。

ここまでは私事で何んでもありませんが、あとで、水の恐ろしさを知っておけばこんな目に会わなくてすんだのでは、という事です。切れ戸（ミオ）の所は、土台を根こそぎ洗い流すので、その附近は危ないが、浸水の水だけなら、水が鴨居まできても家が倒れたり流されることは先ずないとか、上流から切れて浸水する水なら避難するまでに時間があり、或程度支度は出来るとも聞きます。今度の台風は津波と両方重なったので、アッと言う早さで、手の打ちようありませんでした。大島は一旦水ですが、水足が早く、そのかわり引くのも早かったそうです。私共は一番真最中に流されていたので、お話しになりません。

信じられません。二階に居れば何んでもなかったに過ぎません。飛び出た失敗を申し上げているのです。水の流れが下流からと上流からと渦を巻いていたように思う。次の日の流失物を見ても分かるように、南の物が北へ、西の物が東へと、思いもよらん所で、家の印の入った家具を探す人々の声、口々に「考えがつかない。どう言うふう浸水し、津波とのぶつかりがあったのか。同時に起きたのか……。夜のことでさっぱり分からない」とも言っていました。地震でも水害でも、外へ飛び出る方が却って危ないのではないのでしょうか。

或人が言いました。「おやじがよく話していた。『水害の時は外へ出るな。いよいよとなれば天井をつき破って屋根に登って助けを求めよ』と」。

昔大島は川の中の霞山にあって、毎年のように水害に遭い、そのつど、いつも準備を心得ていたとも聞き及びます。それで川幅を広くするために改修され、現在の大島へ引越して来たそうです。七島（長島）でも一番大きい島だから大島と言われたとも聞きました。今は狭い一村に大勢がひしめき合っていると申せましょう。その代り人情と団結も深く、

住みよいかとも言えます。外へ出ないで助かったことの一つに、病人が疊の上で流れ（浮き）、再びそのままの状態が助かったとも聞き、丈夫な者ほど逃げて命を失ったとも聞きます。沢山の人命と大きな資源とを一瞬にして流失した事は、被害にしては余りにいたましい。こんな事が再びあってはならないし、無いとは言えません。

人の話によると、切れた所は百年たっても弱いので、同じ場所が再び切れるとか。……そう言えば、岐阜台風の時も、切れた同じ場所から水がふき出して今にも破れそうで、恐ろしく、不安におののいていました。あの時上流で切れなければ、再びどうなっていたかと、身のすくむ思いです。

大島は水際にいるので、潮のさし引きや水の深さ、堤防に打ち上げる水の勢い等々、地盤沈下で水面に手の届きそうになる此の頃に大潮と流水と風で打ちつける波は心配の種です。一日も早く水防対策を講じて頂きたい、台風のつど不安でなりません。その為にも津波台風の体験記を一人でも多くの人々から聞いて、参考資料として後世に残して下さるというのを、喜んでいる者です。

無智なるが故に、大島のような高い所に

て、こんな体験をしたのです。ましてや真只中に居られた方々は如何ばかりと……。その身でなければ分らない苦しみと難儀との戦

いであつたと想像に絶します。前後して分らないと思います。思う十分の一も書けません。

伊勢湾台風の出

長島町職員

水谷一郎

私が伊勢湾台風に遭遇したのは二十一才、役場へ奉職して一年半の時でした。

当時、私は長島町消防団の機動分団員も兼ねており、あの日も朝から暴風雨警報が発令されて、携帯ラジオを頼りに、刻々と入る情報によって町内を巡視していました。

夕方五時頃の巡視では既に松蔭堤防上には強風によって、脇に置いてある小舟やそだ（のり用の竹）が吹き飛ばされて邪魔をしております。それを車（ダットサンピックアップ）から降りて手でどけ乍ら進み、木曽川堤防から長良川堤防へ差しかかる迄には相当の間がかり、白鷺附近では、長良川の水位は堤防上から五十センチ位来ておりましたが、

この水が堤防を越すとは夢にも思いませんでした。

車で走るにつれて、ますます風雨が強くなり、大島附近では今にも堤防を大波が越えそうな勢いになり、身の危険を感じる様になりました。

やっこの思いで役場庁舎へ帰ったのが六時半頃だったと思います。庁舎内には、町長以下殆んど男子職員、消防団員、三重県警察本部の機動隊員等が待機をしていました。

時が経つに従い、ますます風雨は激しくなり、小休止の後再び巡視に出ようとしても強風で車庫迄歩く事が出来ず、これでは車もひっくり返るであろうと、見回りは断念せざる

を得ませんでした。

それから一段と風雨は強まり庁舎南側のガラスが次々に割れて行き、雨もりもひどい為、書類を二階へ上げておりました。

七時半頃だったと思いますが、当時の大島漁業協同組合長高木甚二氏より電話で本部あてに「堤防が切れたぞ……」との連絡が入ると同時に電話線がプツリと切れてしまいました。

この時には、既に台風の目に入っていたのか、多少、風雨は弱まった感じがしましたが電話連絡があつてから、もの十分も経たないうちに、丁度町の通り（雪月）の方を見えていますと、白い物が凄スピードでこちらへ向つて来ます。よく見るとこれが洪水でした。まるで道路一杯に箱の様な格好で迫つて来るのですから、あの恐ろしさは今でも忘れません。あわてて自分の机の引出しから、その日買ったばかりのカメラ（今でも使っている）を持って二階へ上るのがやっとでした。

二階へ上りますと、遠くの方で「おい、助けてくれ……」屋根の上から叫び乍ら流されて行く人もありましたが、ほんの近くの人だけしか助ける事が出来ませんでした。……當時を振り返ると、堤防は絶対に切れない

と言う神話を信じておったのが犠牲者を多く出した最大の原因だと思えます。

あれから二十年、伊勢湾台風の恐ろしさを知らない人達が段々増えて来ます。いずれは

遠い昔の事として忘れ去られて行き、いつの日か、又、このような災害が来るのではないだろうか。

伊勢湾台風と長島町

改良区

武

藤 繁

一

台風経過

昭和三十四年九月二十一日マリアナ群島の東にあった弱い低気圧が急速に発達して、翌二十二日に台風十五号となり（後、伊勢湾台風となる）毎時二〇～二五キロメートルのゆっくりした速度で北西進を続け、二十五日午後潮岬の南凡そ一、〇〇〇キロメートル附近に達した後、北西乃至北々西に向きを変え、二十六日夕方六時頃潮岬の西方十五キロメートルの処に達した。台風は強い勢力の儘少しも衰えを見せず北上を続け、十九時には奈良

和歌山県境、二十一時には亀山附近を通過して二十三時には岐阜県白川附近、二十七日〇時には富山の東を通過、〇時四十五分高田と糸魚川の中間から日本海に抜け、毎時七十五キロメートルの速い速度で北々東進を続けた。以上台風の順路であるが、其の中で台風襲来当日の模様を少々薄れかけた記憶を辿り、又沢山の方々から助言を頂き書く事にしました。

台風上陸当日の状況

九月二十六日は大型台風の接近を示す様に

朝から断続的に雨が降り、低い雨雲が南東から西北に向かって飛ぶ様に走り、台風前の静かさ？ 割合と静かで昼迄位は殆ど風が無かった。漸く昼過ぎになって風が始め次第に強さを増して来たのでした。

長島町は農村地帯が故に田圃には収穫を真近に控えた稲穂が重く頭を垂れ、其の他野菜も史上空前の大豊作が予想されて居ました。それ程何もかも良く出来、楽しい秋を目前にしての怨めしい台風の襲来であった。

私は千倉排水機場でポンプの運転を朝から続行し、改良区の役員共々厳重な警戒を続けて居りましたが、午后三時頃長良川の水位が異状に高くなり、又内水位は殆どよく排水も出来たので運転を打ち切り、暫く待機して居ましたが、午后五時半頃家の戸締りと台風が通過後必ず二、三日は連続排水機運転の為、泊り込み食糧調達の為、千倉排水機場を後にし帰路についた。

もうその頃になると非常に風は強く、家迄、千倉から西川迄自転車で殆どペダルを踏む事なく風の力で、一人笑い乍ら帰った確かな記憶がある。

夜

扱、当夜六時頃になるともう雨や風は雨戸を叩きつける様に激しさを増し、木の葉が吹き飛ばされ、一段と物凄さを増してきた。台風が激しさを増すと必ず停電するので、戸締りを終え早い夕飯を過ませたのは此の時分だったと思います。

そして夕飯を終え、いざ千倉へ出掛けようと思ひ外に出ようと思ひましたが、もう激しい風と雨にはばまれ外へ出る事すら出来ない状態になっていました。午後七時頃だったと思います。突然青い閃光が真暗な世界を走った。ハッとして耳をすまし音を待ったが、何も聞えない。高圧線でもショートしたのかな？と思う間もなく又稲妻が走る。物凄く風と雨の中時折光る無気味な閃光は、どれ程不安に陥れたか計り知れない。恐らく此の夜は誰しもが同じ心境であつたであろう。

愈々風雨は強まり、私は表の廊下の方へ廻り、今にも吹き飛ばされそうな雨戸を家内全員で押える様指示し、皆で一生懸命頑張っていました。それより一時間くらい前、六時頃既に停電し暗黒の世界の内に何時止むとも知らず増々激しさを増す台風の猛威に、只もう必死に神に祈り早く静まるのを願わずにはいられなかったのです。モーレッツな台風になっ

た。屋根瓦が飛び始めた。風と雨が表の廊下で戸を押えて居る頭から物凄く、雨が漏れてきたがどうする事もできない。風は真東から猛烈に吹き荒れている。少し南寄りに風向が変り始めた頃、家に何か々当る音がした、と思った瞬間、家の東の壁の壁が抜け、家の中へ吹込んだ。丁度子供や家内、父母等そこに居て悲鳴を上げた。家の中は泥煙で又猛烈に吹込む風と雨、家がぐらぐらゆれる。もう駄目かと一瞬思った。時間は午後九時前後である。それから間もなく風向が少し南へ変わった様な気がした。依然として風雨は強く、全く衰えを見ない。家の陰から外へ出て家の表（東南側）へ出ようとしたが、風が強く立ては歩けない。四つばいになり家の東側へ出た途端、全身を雨が叩きつけてくる。痛い。さながら小さなバラスを投げつけられる様に全く痛い。風上に向って顔は向けられず、勿論目を開ける事も出来ない。再び家の中へ戻り暫く待った。それから間もなく南東に風向きが変った。

九時三十分頃

今迄猛烈に吹いていた風が少し弱くなった

ので表に出た、と云っても家の表から出入りは出来ず風下の裏口から前に廻って表へ出たとき、隣の人から水入りを知らされた。「直ぐ隣へ連絡して下さい」と云って帰られた。其の時未だ全然水の気配は無かったが、直ぐに隣へ連絡に走った。

長島町 沈没

九時五十分頃か、十時前後か時間は大体そんな頃であつたろうと思われる。依然として風雨は強い。私達の部落は長島町の北部で、その時間には国道一号線以南に於いては、木曾・長良の両堤防はズタズタに寸断され、伊勢湾の高潮が大津波となり長島町を南から北に向って押寄せ、もうその津波の先端が西川南部に迫っていたのである。元に戻り、私は隣の家の表戸を力一杯叩き、引返そうとしてびっくり。今しがた一、二分前此の家迄来るとき、雨で道路は濡れてはいたが水は無く、まさか水が流れていようとは夢にも知らず、同じ様に小走りて庭から道路へ下りた途端、水深三十センチメートル位あり、然も物凄く速さで足を取られる位の力があつた。びっくりして夢中で家迄辿りつき、家族全員に伝え

ると共に直に二階へ何もかも持上げるのに一生懸命。この間に早くも家の中へ水が一杯に入り込んだ。僅か四、五分で床上一メートル迄上った。風は強いが雨は幾分弱くなった様に思えた。台風経験は幾度となくあるが、大暴風雨の真最中に水入り。然も海水である。何処の堤防が切れたのか皆目見当がつかないが、南部、下手の方と云う事はおぼろげながら分かった。停電に伴い有線も切断されて分からず、ラジオは台風情報を流した程度で、深夜に於ける情報は何一つ分からず、只真暗な夜の海以外何も分からない。

台風通過

十一時半過ぎ漸く風は南西に変わり、今度は強い西風に変っていった。水深三メートル程の浅い海と化した田圃を、西から浪の華が咲き、すさまじい迄の勢いで我が家へぶつかつて来るのが夜目にもはっきり分かった。十二時を過ぎ一時、二時とまんじりともせず夜明けを待った。全く長く感じた。喉の渴きを覚えて前夜のお茶を飲み、そっとあたりを見廻し家族全員無事であった事をひそかに喜び、しばしまどろんだが、打寄せる波が家に当り

その度にぐらぐら揺れるので眠る事も出来ず待遠しい朝を迎えた。

水害

午前四時西北に風は変わり、未だかなり吹いてはいたが、天気は良く、白々と明けてきた。然し時間が経つにつれ、全く別の世界が広がっていた。午前五時、もうこの頃になれば夜明けである。昨日迄は重く稲穂を垂れ豊作を約束した美しい田圃、見事に出来た野菜、そして花一切が水に沈み、何も見えないのみか家の前に沢山のゴミ、木片、竹、鶏の死骸、家庭用品、壺等、激しい波にもまれ原形の面影とてない色々な物が一緒にたまって畑の上に流れついているのを見て、又遠くへ目をやり旧楠村（北部）を眺めたとき茫然としてしまった。そして、このとき長島だけが、こんなにひどい目に逢ったのだと云う風に思えもう駄目だと思った。私はこの光景を目の前にして、色々な事が頭の中で交錯した。今後の生活の問題、長島町の今後のこと等、空腹を忘れ、茫然とした。

二、三時間経った頃、南部の方へ、飛行機、ヘリコプター等しきりに飛来し、旋回を始め

た。七時乃至八時頃か？、何機となく飛来しては消えたが、未だ其の時迄では沢山の人員が犠牲になられた事は全然分からなかった。

其の朝は前夜からの残り物で食事をすませて近所の人達と無事を喜び合い、何しようしたものかと思案した。水の中である。隣へ行こうにも舟無しでは動けない。だが何かを知りたい。そして一体どうなって居るのか世間が知りたい。やっと色々木片を集めて急造筏を作った。前夜襲った高潮津波はもう無く、伊勢湾の普通の潮位に変わり、潮が満ち引きする様になった。二十七日九時頃になって筏を漕ぎ舟を探したが、なかなか見つからず、西川の堤防迄行った。驚いた事に堤防の際に沢山の流木、ゴミ等が流れ付き、その中に舟を見つけたが容易に出せない。真新しい舟も真二つに割れている。其処、此処に舟は在ったが殆ど傷みがひどく、使い物にならない。やっと新しいのを探し出し、弟と二人で協和迄行った。肉親（姉）達の無事を見て、帰路について、道中、長島駅の端を通り、横から見た長島駅は駅舎はあったが道床は洗われ、線路はくの字に曲り、ホームは頑丈なコンクリートが割れ殆ど面影はなく、近鉄も又然り。近鉄は電柱と云う電柱は残らず横倒しとなり、

道床は洗われて全くその用をなさず、目を覆う惨状であった。鉄道で残っているのは鉄橋だけで、後は全滅だなど直感した。

私はこの光景を思い起し、それから何をしていたかを又改めて思い起してこれを前編とし、史料を集めて、後編を書きたいと思いま

す。

これを書くにあたり、学無く才能もなく、誤字の多い点、そして書きくずしの多い点等御詫び申上げまして、一先ず翌日までの感想文とさせて頂きます。

改めて知った。

どこから逃げて来たのか牛が一匹目をギョロつかせていたが、どうしてやることもできなかった。

急に風向きが西になり、これで助かったと直感した。結んでいた者一同「凄いい台風で相当の被害が出たろうな」と云いつつ出水状況を見に堤防に上ったが、大した出水もなく一同安心して今後の行動をどうするか思案していたら、「堤防が切れたらしい」と連絡が入り、東の田を見ると暗闇の中、田面が真白く水の押し寄せてくるのが分かった。

「水が入ったぞ。堤防が切れたぞ」と連呼して歩いたが、倒れた電柱や電線があって走ることができず、気ばかり焦るのだが他にどうしてよいか分からず、朝を待つことにした。夜が明けると一面の水と吹き寄せられた材木の山で、余りにも変り果てた様相に驚くばかりだった。

舟を拾って我が家へついたら、妻子と隣の人々が待っていた。すぐ舟に乗せ兄の家へ送って、再び堤防へもどり、何んとかして本庁へ行こうと押付まで行ったものの、国道、近鉄国鉄とも水浸しで行くことができなかった。国鉄の線路に座り込んで暫く周囲を眺めてい

伊勢湾台風の思い出

長島町職員

村

上

光

弘

ラジオが盛んに大型台風と報じていたが、過去に台風被害の目立ったものを見ていない為、そう大げさには考えなかった。

夕方六時に台風警戒に出るよう命をうけて各自、家の戸締りに帰った。台風が急に速度を増した為か、五時には木の枝がちぎれ飛んでいた。妻に二階で寝るよう指示して家を出たが、雨が顔に刺さるような勢いの上、木の枝や瓦が道路に落ちていて、とても本庁まで行ける自信がもてず、北部詰所（旧楠村役場）へ出ることにした。道中、背後から凄いい

たが、一面の水と吹き寄せられた小屋や流木の山で、この先どうなるのだろう。牛や豚の死骸もあり、筆舌に尽くせぬ惨状だった。

翌日兄に役場まで送って貰ったが、庁舎の内は机や材木や書類で足の踏み場もない有様

で、どうすることもできない有様だった。

台風と高潮で堤防がズタズタになり、未曾有の大災害になったわけだが、堤防に囲まれ堤防によって生命財産が守られていることを今一度肝に銘ずべきであろう。

伊勢湾台風を思い出して

中筋北 諸 戸 三 吉

早くも伊勢湾台風より二十年。振り返って当時の事を思えば、あの無気味なピカピカ光る潮の光を見て気味悪く思ってた。真暗の中でローソクの灯をたよりに只茫然と致して居るばかりであった。其の内に水がだんだんと増しだした。床下まで入って来た。一瞬にして泥水と化した。二、三時間過ぎた頃一米

最後に、台風犠牲者の御霊に御冥福を御祈り致しますと共に、復興に御尽力下さいました方々に感謝致します。

余引き、其の夜は一休みも出来ず一夜を明かし、早朝外に出て見渡せば一面海と化し、流木や、いろいろの物が流れて、誠に悲惨な情態であったあの当時の事を思い出し、町一帯は無惨な有様であった。

あ　と　が　き

昭和五十四年九月に伊勢湾台風二十周年記念の事業の一つとして『伊勢湾台風体験記』を募りましたところ、多数御応募頂きました。この一部を記念誌に掲載致しましたが、後世に体験記録として残すため、全文を冊子にすることとしました。伊勢湾台風から二十年、被災者に焼きつけられた思い出を振り返って文字に残して頂いたものです。大切に保存したいと思います。

伊勢湾台風体験記

昭和五十五年九月

発行 長島町教育委員会

17

1. The first part of the paper is devoted to the study of the properties of the function $f(x)$ defined by the equation $f(x) = \int_0^x f(t) dt$. It is shown that $f(x)$ is a constant function, and its value is determined by the initial condition $f(0) = 1$.

2. The second part of the paper is devoted to the study of the properties of the function $g(x)$ defined by the equation $g(x) = \int_0^x g(t) dt$. It is shown that $g(x)$ is a constant function, and its value is determined by the initial condition $g(0) = 1$.